

# 禅僧

坂口安吾

青空文庫



雪国の山奥の寒村に若い禪僧が住んでいた。身持ちがわるく、村人の評判はいい方ではなかつた。

禪僧に限らず村の知識階級は概して移住者でありすべて好色のために悪評であつた。医者がそうである。医者も禪僧とほぼ同年輩の三十四五で、隣村の医者の推薦によつて学校の研究室からいきなり山奥の雪国へやつてきたが、ぞろりとした着流しに白足袋という風俗で、自動車の迎えがなければ往診に応じないという男、その自動車は隣<sup>となり</sup>字<sup>あざ</sup>の小さな温泉場に春半<sup>なかば</sup>から秋半<sup>なかば</sup>の半年だけ三四台たむろしている。勿論中産以下の、順<sup>したが</sup>つて村大半の百姓には雇えない。

農村へ旅行するなら南の方へ行くことだ。北の農家は暗さがあるばかりで、旅行者を慰めるに足る詩趣の方は数えるほどもありはない。この山奥の農村では年に三人ぐらいずつ自殺者がある。方法は首吊りと、菱の密生した古沼へ飛び込むことの二つである。原因是食えないからというだけで、尤も時々は失恋自殺もあるのだが、後者の方は都会のそれと同じことで、村人の話題になつても陽気ではある。珍らしく一人の旅人がこの村へ来て、散歩にでたら葬式にてくわした。この葬式は山陰の崩れそうな農家から出発、今や禅寺をさして行進を開始したところだが、先頭が坊主で、次に幟のぼりのようものをかついだ男、それにつづく七八名で、ジャランジャランという金鉢のようなものをすりまわしながら行

進するのが寒々とした中にも異様な夢幻へ心を誘う風景であつた。こんな山奥でも人は死ぬ、余りに当然なことながら、夢のようにはかない気がした。きっと年寄りが死んだのでしょうか？ と旅人は傍らの農夫にたずねてみた。へえ年寄りが首をくくつて死んだのです。え、自殺？ そんなことがこの山奥にあるのですか？ へえ年に三四人ずつあるようです。貴方の足もとの、ほらこの沼へとびこんでその年寄りは冷たくなつて浮いていたのです。棒がとどかないので、私達が盥に乗りだして引上げたのですが、盥に菱がからまつて私達までなんべん水へ落ちそうになつたか知れません、と言うのであつた。旅人は一度に白々とした気持ちを感じた。全てが一家族のような小さな村にも路頭ろとうに迷つて死を求

める人がある、都會の自殺には霸氣<sup>はき</sup>がありむしろ弾力もある生命力が感じられるが、この山奥の自殺者の無力さ加減、絶望なぞと一口に言つても、もともと言いたてるほどの望みすらないところへ、それが愈々 『いよいよ』 絶えたとなると一体どういう濶みき<sup>よどみ</sup>つた空しさだけが残るだろうか、考えただけでも旅人はうんざりして暗くならざるを得なかつた。この山村の自殺は小石を一つづまみあげて古沼の中へ落すことと同じような努力も張り合いもない出来事に見えた。

医者は多少の財産があるのか、夏は温泉で遊び冬は櫂<sup>そり</sup>を走らして遠い町へ遊びにでかけた。夏の山路は九十九折<sup>つくづらおり</sup>で夜道は自動車も危険だが、冬は谷が雪でうずまり夜も雪明りで何心配なく櫂が

谷を走るのだ。そのうちに村の娘を孕<sup>はら</sup>まして問題を起した。

知識階級の移住者には小学校の先生があるが、この人達も評判がわるい。男女教員の風儀だとか吝嗇<sup>りんしょく</sup>とか不勤勉ということが村人の眼にあまるのである。ところがそういう村人は森の小獸と同じように野合<sup>やごう</sup>にふけつているのである。盆踊りを絶頂にした本能の走るがままの夏期のたわむれ、丈<sup>じよ</sup>余<sup>よ</sup>の雪に青春の足跡をしるしている夜這<sup>よば</sup>い、村人達の生活から將<sup>かつまた</sup>又<sup>よ</sup>思い出からそれをとりのぞいたら生々とした何が残ろう！ 半年村をとざしてしまう深雪だけでも彼等の勤労の生活は南方の半分になるわけだが、山々を段々に切りひらいて清水を満した水田と暗澹<sup>あんたん</sup>たる気候で米の実りの悪いことは改めて言うまでもないことである。 豊<sup>ほうじよ</sup>

穰う という感じが、気候や風景に就いても同断であるが、その生活に就いても全く見当らないのである。

禅僧は同じ村のお綱という若い農婦に惚れた。この農婦が普通の女ではなかつた。野性そのままの女であつた。

お綱は小学校に通う頃から春に目覚めて数名の若者を手玉につたと言われるほどの娘。小学校を卒業すると町の工場へ女工に送られたが居たたまらず、東京へ逃げて自分勝手に女中奉公した。昔郡役所のあつた町に小金持の老人があつたが、借金のかたとでもいうわけか、お綱は呼び寄せられてこの老人の妾めかけになつた。その時が十八。五年目に老人が死んだ、妾時代お綱は出入りの男達

と相手選ばずの浮氣をしたが、老人が死ぬと身体一つでのこのこ  
村へもどってきた、身体のほかに持っていたのは頭抜けた樂天性  
と健忘性と野性のままの性慾だつた。村へきても誰はばからず本  
能の走るがままに生活した。そういうお綱に惚れて、自殺したう  
ぶな男もあつたのである。

ある時村へ一人の旅人がきた。隣字の温泉へ行くつもりのもの  
が生憎あいにくと行暮れて、この字では唯一軒の旅籠はたご兼居酒屋の暖簾のれんを  
くぐつたのである。農家の土間へ牀机しょうぎをすえ手製の卓を置いた  
だけの暗い不潔な家で、いわゆる地方でだるまという種類に属す  
る一見三十五六、娼妓しょうぎあがりの淫いんをすすめる年増女が一人いた。  
こんな疲弊ひへいした山村では淫売がむしろ快活な労働にもなるのだろ

うが、見るからに快活、無邪氣、陽氣で、健康な女がいるのである。そういううだるまの一人がこの店にもいた。

旅人がこの銘酒屋の暖簾をくぐつて現われたとき、土間の卓には禅僧がお綱と共に地酒をのんでいる時であった。山村のことでは旅人をむかえる部屋が年中用意されているわけでもないから、部屋の支度をととのえるあいだ、旅人も卓によつて地酒をのんだ、旅人を見るとお綱の浮氣の虫が動いた。

部屋の支度したくができ、旅人は二階へ上つて、だるまを相手に改めて酒をのみはじめた。暫くすると階段をのぼる威勢のいい跔音あしおとがどんどんとんとんと弾んはずてきて、お綱がにやにや笑いながら、旅人の部屋へ現われた。坐ろうとしないで、すくすく延びきつた肢体

をくねらせながら突立つたままであるが、片手を目の下へもつて行き、のぞき眼鏡のような手の恰好をこしらえて人差指でおいでおいでをしたのである。旅人は莫迦々々々さに苦笑せずにいられなかつた。

「ここへ暫く泊るの？」

「明日から温泉へ泊るのだ」

「明日の晩、今時分ここへおいで」

野性の持つあの大胆な、キラキラとなまめかしく光る流眄ながしめを送り、お綱はくるりとふりむいた。そうして歩きだしたと思うと、そんな婆あと遊ぶんじやないよ、と言ひすて、野禽やきんのように行つたましい笑い声をたてながら階段を調子をとつて駆け降りて行つ

た。面喰つた旅人よりも、禅僧の悩みの方が複雑であつたのは言うまでもあるまい。お綱の奴が急に二階へとんとん登つて行つた意味は一目瞭然であるから、さかりのついた猫の声と同様のけたたましい笑い声を耳にしては腸のよじれる思いがしたことであろう。

翌朝旅人が温泉へ向けて出発すると、その一町ほどうしろから禅僧がうなだれがちに歩いていた。禅僧は旅人に一言頼みたいことがあつたのである。あの野性のままの女を旅先の気まぐれな玩具おもちゃにしないでくれ、と。禅僧は栄養不足でヒヨロヒヨロやせ、顔色は不健康な土色だつた。強度の近視眼で、怪しむように人を視凝める癖があつた。縞目しまめも分らないほど古く汚れた背広を着て

脚絆に草鞋をはいていた。

禅僧のたどたどしい足どりがそれでも十間ぐらいの距離まで旅人に近づいた時のことだが、旅人は九十九折の山徑のとある曲路にさしかかつた。一方は山の岩肌、一方は谷だ。

突然頭上のくさむらから人間の頭ほどある石が落ちて、旅人の眼の先一尺のところを掠め、石は徑にはずみながら、大きな音響を木魂しながら深い谷へ落ちていった。旅人が慄然として頭をあげると、姿はもはや見えないが頭上のくさむらをわけ灌木の中をくぐつて逃げて行く者の気配がはつきり分つた。

「あいつですよ。ゆうべ私と酒をのんでいた女、突然貴方の部屋へおしかけていった農婦です」

咄嗟とっさ

の出来事にこれも面喰つて足速やに駆けつけた禅僧は、蒼

ざめ、つきつめた顔をかすかに痙攣けいれんさせながら旅人に言つた。

「あいつは貴方に氣があるので。いいえ、貴方に限らず、初めて会つた男には誰にしろ色目をつかい、からかいたい氣持を懷かずいだすにいられぬのです。恐らくあいつは今朝早くからあの岩角へまたがり、石をだきながら貴方の通るのを待ちかまえていたのでしよう。楽しい気持ちでいっぱい、その石が貴方に当つて怪我をさせたらどうしよう、ということはてんで頭になかつたに違いないのです。二年前のことですが、やつぱりこういう山径を好きな男と肩を並べて歩いているうちに、突然男を谷底へ突き落したことがあります。幸い男は松の枝にひつかつて谷へ落ちこむこ

とだけはまぬかれましたが、松の枝にぶらさがつて男が必死にもがいていると、あいつは径に腹這いになつて首をのばし男の様子をキラキラ光る眼差しで視凝めながら、悦樂の亢奮こうふんのため息をはずませていたという話があるのですよ。あいつに散々あやつられたあげく菱の密生した沼へ身を投げて死んだ若者が二人もあります。たとい男が身を投げたつて、だいいち昨日の男を今日は忘れているのですよ。貴方の場合にしたつて、今日貴方に氣があります。そうしてあいつはあの岩角にまたがり、異体の知れぬ悦樂の亢奮に酔いながら、石をだいて貴方の通るのを待ちかまえていたのです。殺意とか罪惡とかそんなものじやないんです。子供がパチンコで豚をねらうよりよっぽど無邪氣で罪惡の内省がな

いのですよ。いじらしい女です。正体はただそれだけでつきるのですが——」

禅僧の語氣には、旅人が呆気にとられてしまうほど熱がこもつてきたのであつた。そうしてこれからどうなつたか、然し旅人の話は村人の噂に残つていない。

お綱の逸話いつわでは、煙草工場の女工カルメン組打の一場景に彷彿ほうふくとしたこんな話もあるのだ。

時は盆踊りの季節。ひと月おくれの八月の行事で、夏の短い雪国では言うまでもなく凋落ちようらくの季節、本能の年の最後の饗宴きょうえんでもある。盆踊りは山の頂きのぶなに囲まれた神社の境内で、

お綱も踊りに狂っていた。その日のホセは道路工事の土方で、居酒屋で酒をのみながら、店の老婆を走らしてお綱を迎いにやつたが、お綱は踊りに狂つていて耳をかそともしなかつた。

そういうするうち踊りの列に異変が起つた。突然お綱が一人の娘を突き倒して、馬乗りになりつかむ、殴る、つねる、お綱には腕力があるから、娘の鼻と唇から血潮が流れでた。原因というのは、お綱が踊りながら女に向つて、お前の色男が俺に色目をつかったよとからかったところから、この娘がやつきになつて俺の色男はお妾あがりに手出しをしないよ、そこでお綱がカツとしてこの野郎と組ついたという次第であった。娘の顔を血まみれにしては、お綱が人々に憎まれたのも仕方がなかつた。

五六名の若者が忽ちお綱をとりかこんだ。一人がお綱の襟首をつかんで血塗れの娘の胸から力まかせに引離したが、お綱はくそりと振向いてサツと片腕をふり男の顔を力一杯張りつけた。それから一足とびのいて、ゲタゲタと腹をよじつて笑いだした。張られた男はお綱をめがけて飛びかかつた。右手をとらえて後手にねじあげようとしたのであるが、お綱は男の手首に血の滲むまで噛みついて執られた腕をふりはなし、男の胃袋をめがけて激しいそして敏活な一撃の頭突きをくらわせた。ひとたまりもなく倒れる男に馬乗りとなつて、苦悶のためにのたうつ男の首をしめて地面へぐいぐいおしつけた。きしむような満悦の笑いに胸をはずませ、無我無中のていで顔面をなぐり、つねつた。

四五名の若者達は激怒して各 お綱を蹴倒したが、お綱は忽ち猛然と立ち上ると、誰を選ばず飛びかかり、噛みつき、引搔き、なぐりかかつた。もはやその悦楽の亢奮は色情狂を思させた。淫慾は酔いのように全身にまわり、敏活な動作につれて、満悦の笑声がきしむように洩れるのである。蹴倒される、ひとたまりもなく転ろがる。地面へ顔のめりこむほど、てひどく倒されることもあつた。然しはねかえるバネのように飛びかかつて行くのである。

性<sup>しょう</sup>こりもなくじやれつく牝犬もこれほどしつこくはあるまいと思われ、若者達も流石<sup>さすが</sup>に根負けのじぶんになつて、お綱は淫乱そのものの瞳を燃やして歎声をあげ、若者達の囮みをやぶつて闇の奥へころがるよう走り去つた。ひときわ高く 哄<sup>こうしょく</sup>笑<sup>こうしょく</sup>をひいて。

憎しみにもえ激怒のために亢奮したといいながらそれが色情の一変形であつたところの若者達は、自分ながらしつこさの醜いに氣付くほど野性そのままの衝動にかられ、然しもはや自制の力はなかつたのだが、七八名一団となつてお綱のあとを追いかけていつた。お綱は居酒屋へかけこんだ。そこには土方が待つていた。お綱は土方の卓に倒れた。彼には決して理解することのできなかつた逸樂のあと満足のために疲れきつた肢体をなげだし、お綱は苦しげに笑いのしぶきを吐きだしていた。若者達の一団が追いついた。――

はなは

甚だありふれた事情が起つた。同時に奇妙な事件であつた。

居酒屋には亦のほかにも一人の土方がだるまを相手にしてい

たが、彼等はこの土地の鈍重な自然人とは種属がちがつて、流れ者の度胸と機に応ずる才智があつた。二人の土方は立ち上つた。若者達は顔色と言葉を失い、あとじさりした。道路へじりじりさがつていつた。二人の土方も道路へでた。若者達の一団に氣転のきいた一人がいたらここで一言わびるだけで無事無難に終つたのだが、鈍重な気候や自然是そういう氣転と仇敵きゆうてきの間柄ではぜひもない。こんな騒ぎが起つても村は眠つてゐるのである。もとより人家すら三十間に一軒ぐらいの間隔で至つてまばらなものであるが、その住人も山の頂きの踊りの方へ出払つてゐる。赤ん坊と植物と暗闇だけではこの騒ぎも誰知る人があるまいと思ひのほか、生憎の人物がどうしたはずみかこの場に居合わしていた

のである。禅僧であつた。

異様なそうして貧弱な肉塊が突然土方に躍りかかつた。それが禅僧と分るまで、若者達の誰一人禅僧の存在に気付いた者がいなかつたのだ。彼は殴られ、投げだされ、蹴られ、そして冷めたい地面の上であつけなくのびてしまつた。土方は居酒屋へひきあげた。若者達が禅僧のまわりに歩みよると、彼は鼻血を流していた。彼は人々の存在にも気付かぬように這い起きて、長い時間を費して何物かを地上に探し漸く拾い当てた物品によつて探し物が眼鏡であつたと人々に分つた。一つの咳も洩らしはせず、それが唯一の念願のように、寺院の方へ消えていつた。

とはいえお綱に対する彼の熱情の純粹さももとより当にはなら

ないことで、だるまの言に順えば、その助平坊主の肉慾ほどあくどさしつこさに身の毛のよだつ思いをすることもないと言うのであつた。

疲弊ひへいした村のことで御布施おふせの集りがよからう筈はずはない。金包みの代りに米とか野菜ですますような習慣が次第に一般にひろがつて、禅僧は食うだけが漸くだつた。

禅僧は恋情やみがたくなつたものか、お綱の母親（父はもはや死んでいる）に向つて結婚の交渉をはじめた。禅僧の内輪うちわの生活が次第に栄養不良になる一方の乏しいものでも、貧農ひんのうの目から見れば坊主は裕福ゆうふくという昔からの考えがいくらか残つてはいる。

働き者をとられるとその日から暮しにこまるという理由で五十円の結納金、結婚後は月々十円の扶助料という条件をお綱の母親がもちだした。一步もひこうとしなかつた。

禅僧は思案にくれたあげく、医者どころへ金策にでむいた。医者の方では愈々《いよいよ》坊主も発狂したんじやあるまいかと薄意味わるくなつたぐらいのものである。

「いつたい貴方あなた、それは正気の話ですか？」

と、遠慮を知らない医者がずけずけ言つた。

「あの女は金のいらないだるまでせず。あの女がたつた一人いるおかげで、この村の若者や親爺おやじどもは、だいぶ不自由をしのぎいし金もからないと喜んでいますよ。あの女の不身持ちが普通

のものじやないことは、お分りだらうと思ひますよ。結婚といふ名目での身体が独占できると思ひますか？況んやあいつの精神が？野獸にも精神があるというならあの女にも精神はあるでしょうが、仏力で野獸が済度さいどできますかな。五十円の結納金。十円の扶助料。きいただけでも莫迦々々しい！」

「獸が獸に惚れたんですよ。私だつて貴方の想像もつかない獸ですよ。とにかく獸の方式でここをひとつやりとげてみようと思つたわけですね。やらない先に後悔してはいけなかろうと思うのですよ」

「禪問答のように仰おっしゃ有らないで下さいよ！五十円の結納金なら明らかに人間の方式ですぜ。獸の方式なら今迄通り山の畠でお

綱とねる方がいいでしよう。そうして、それ以上の名案は絶対にみつかりっこありませんや。全くですよ！ 仰有る通り獸になりなさい、獸に。人間になろうなんて飛んでもない考え方違ひだ！

そうして今迄通りの交渉で満足することが第一です」

禪僧が自ら獸と言うた言葉を医者は面白いと思つた。お綱の畠は村の西と北角の山ふところに、十数町の距離をおいて散在したが、お綱の姿を探して段々畠をうろうろと距離一杯にうろついている坊主の姿を山の人々は見馴みなれていた。言われた言葉で思いだすと、飢えた狼のように見えた。あまりに生々しく醜怪だと医者は舌打したのであつた。

然し坊主が自ら獸と言つた言葉は、医者が単純に肯定した程度

の生やさしい内省から生れたものではなかつたのである。

或る黃昏たそがれ禪僧はお綱と二人でどんよりと濱んだ古沼のふちを通つていた。突然お綱の手が彼の腰へ触つたような気がすると（実際は触らなかつたらしい）彼はもう古沼の中へ突き落されるのだとthoughtた。悲鳴をあげるにも喉がつまつて叫びがでなかつた。苦悶くもんのために表情は歪ゆがみ、足は竦すくんで動けなかつた。ヒイヒイという掠かすれた悲鳴が喉のどにうなつた。これだけの物々しい前奏曲があつたために、お綱もつい突き落す気持になつたのである。それ程の力をいれて突いたわけでもなかつたのに、坊主はあつけなく古沼へ落ちた。水の中での死にもの狂いの騒ぎといつたらなかつたのである。死を怖れる最も大きな苦悶と醜体がかたどられていた。

坊主のもがいていた場所は岸から三尺ばかりのところで、落付いて腕をのばせば子供でも溺<sup>おぼ</sup>れる心配のない場所である。彼が恐らく全身のエネルギーを使いきった証拠には、漸く岸へ這いあがると、這いあがつたなりの腹這いの恰好のまま、だらしなくのびてしまつて這いざることもできなかつた。それを見ると、お綱の眼の光が全く変つた。真剣なものが全身にみなぎり、亢奮のために胸がふくれ、急に顔に紅味がさした。お綱は猿臂<sup>えんび</sup>をのばして禅僧の襟首をとらえ、ずるずるとひきずつて今度は真剣に古沼の中へ頭の方から押し込んでしまおうとしたのである。禅僧はギヤツという悲鳴をあげてお綱の片足にかじりついた。お綱よ、命だけは助けてくれ！ 死ぬのは怖い！ 禅僧の声は遠雷のように喉の奥

でゴロゴロ鳴り、くいついた蠅螺<sup>さざえ</sup>のようにお綱の脛<sup>すね</sup>にぶらさがつて恐怖のあまり泣きだしていた。

こういう話もある。

これは寺院の中で行われた出来事。お綱が眠りからさめて帰ろうとするとホーゼがなかつた。お綱のホーゼのことだから赤い色もさめはて、肉臭もしみ、よれよれの汚いものに相違ない。禅僧をゆり起して出せと言つたが、彼は返事をしなかつた。

お綱は突然激怒して禅僧を組敷き、後手<sup>うしろで</sup>にいました。本堂へひきずりこみ、これを柱にくくりつけて、着物をビリビリひき裂いて裸にしてしまつた。仏壇から大きな蠅<sup>ろうそく</sup>燭<sup>ろうそく</sup>をとりおろして火を点けると、坊主の睾丸にいきなりこれを差しつけたという。

坊主の身体がいきなりはじきあがつたのは申すまでもない話で、百本の足があるかのようになにバタバタガタガタとやつた。柱の廻りを腰から下の部分だけで必死に逃げまわりながら、ワアワアギヤアギヤア<sup>わめ</sup>喚きたてたといつたらない。喚きがどんなにひどかつたか、到頭一人の村人がききつけて寺の本堂へかけこんできた。もがき、喚いているのは裸体のまま柱にいましめられた坊主ひとり、大きな暗闇の中に蠟燭を握り、坊主の鼻先に小腰をかがめているお綱の姿は微動<sup>びどう</sup>もしていなかつた。キラキラと光る眼付で坊主の顔をむしろボンヤリ視凝<sup>みつ</sup>めていたそうである。

結尾坊主はホーゼを渡したかどうか？ そのことは村人も各の想像を働かすだけで区々である。

然しこういう話もあるのだ。

ある年の暮れ村の青年が景気よく忘年会をやつた。尤も雪の降る季節になると、若者と若い女は大概都會へその季節だけ出稼ぎに行く。然しお綱は残つていた。忘年会の会場は小学校の裁縫室、青年会と処女会の合流で、宴<sup>えん</sup>たけなわとなり余興がはじまた。

舞台ではにわかじみた芝居が行われ、お綱がこれに登場して妻君の役をやつてている。芝居が一向につまらなくて皆々だれ氣味になつてしまふと、一人の若者がいたずらを考えついた。手拭<sup>てぬぐい</sup>を三宝にのせ、これに「よだれふき」と麗々しくしたためた奴を敬々しく禪僧の前へ運んでいったものである。舞台ではお綱が人の

妻君になつてせいぜい甘つたれでいる芝居だから、さだめしよだ  
れも流れましょうというあくどい洒落しゃれであつた。

山奥の若者のこととて、咄嗟に洒落ものみこめない。てんでんば  
らばらに漸くああそとかと分つて、あつちでクスリ、こつちでク  
スリ、一度にどつとはこなかつた。そこであくどい男がもう一人、  
今度は洗面器を持つてきて、禅僧の膝の前へ置いたものだ、そう  
して人々はどつと一時に笑いころげた。

禅僧は蒼白になつた。全身がぶるぶるふるえた。洗面器をつか  
んで投げつけようとする氣配が動きかけたほどであつたが、黙然  
と考えこんでしまつたのである。然し急に立ち上つた。そうして  
舞台へ歩いて行つた。舞台では夫婦の二人が芝居を中止して下の

騒ぎあつけを呆氣にとられて見ていたのだが、舞台へ片足をかけると禪僧の全身に獸的な殺氣が走つたのだつた。彼はいきなり芝居の中の夫なる人物を舞台の下へ蹴落した。それからお綱の背中にまわり、お綱を羽搔いじめにしてよろよろとうしろへ倒れ、腰に両足をまきつけてお綱を身動きもさせなかつた。

一座はシンと静まつたが、禪僧は何事も叫ばなかつた。叫ばないも道理、彼のくぼんだ眼玉は死人のように虚しく見開き、口はあんぐりとあけられたまま息も絶えたようであつた。しばらく暫く経て數名の人が舞台へ上つてみると、禪僧は折れ釘くぎのようなたどたどしさでお綱にまきつけた身体をほぐし、ぼんやり立ちあがると、黙つて外へでてしまつた。

禅僧はその夜も勿論、べつに自殺するようなことはなかつた。

翌日はけろりとして今迄通りの生活をつづけていたのだ。こういう姿が獸であるのは他人も無論、彼自らも先刻医者に述べているように知らない筈はなかつたのである。然しながらそういう自分を意識すること、意識しながら生きつづけるということは、恐らく獸にはないことであろう。もとよりそれがどうしたというたいした理窟ではないのだ。

話を深刻めかしてはいけない。北方の山奥に雪が降ると、毎日々々と同じ炉端ろばたに集まる人達が、よもやまの話をするそういう話題のひとつである。

(昭和11年『作品』3号)



# 青空文庫情報

底本：「桜の森の満開の下」 講談社文芸文庫、講談社

1989（平成元）年4月10日第1刷発行

2015（平成27）年4月15日第47刷発行

底本の親本：「坂口安吾選集第六巻」 講談社

1982（昭和57）年5月刊

初出：「作品 第七巻第三号」

1936（昭和11）年3月1日

入力：日根敏晶

校正：noriko saito

2019年9月27日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたつたのは、ボランティアの皆さんです。

# 禪僧

## 坂口安吾

2020年 7月13日 初版

### 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>